

愛のサスペンス

一碧湖畔・ホテル水琴亭

(2007)

十二月の一碧湖畔を一周ながら、過ぎし日のことをふりかえってみると、私の人生も一周してまた振り出しにもどったような気がする。それとも、ある事柄からはなれられずに、堂々巡りをしてきたのかもしれない。

三十数年前、学生時代にこの湖畔ですごしたあの夏の日々。その記憶の大半は、いま、湖畔に降りしきる紅葉のように、風に舞って散ってしまった。しかし、志摩子との出会いだけは、私の心を大きくえぐって深く静謐な湖を形成し、悲しみをたたえている。

一碧湖はふたつの湖面からなる。いま一周してきた大池は、伊豆の瞳、と呼ばれるほど明るく開放的な湖だが、浅く狭い水路でかろうじてつながっているもうひとつの湖面は、沼池、とよばれる湿地で、なにか秘密を隠さなければならぬかのようになり、葦が一面に密生し、森の樹木が湖面まで枝をのびして、岸辺を覆っている。

腕時計を見ると、四時だった。待ち合わせの時間はまだ先だ。沼池のほうも一周してみる気になった。

葦の群生のあいだを縫う丸太の遊歩道があって、その上で犬を連れた女性とすれちがった。それきり人に会うこともなく、岸に沿った閑散とした道がつづいていたが、それもまもなく雑木林に入って消滅してしまった。

木立越しに、岸辺に座った人影を認めた。湖面に向かって画架を立て、厚手のスエターに長いマフラーを首に巻き、ベレー風帽子を斜めにかぶっている。格好だけはそれこそ画にかいたような画家だ。日曜画家のたぐいだろう。大柄な体躯をもてあますように丸めた背に、古い、を背負いはじめていた。なにを描いているのか興味をひかれた私は、背後から近づいた。

こういう場合の常として、近づきすぎて創作の邪魔にならないよう、しかし描いている画がみてとれる程度の距離を保って、斜め後ろに私は立った。画家のほうは、落ち葉を踏みしだいて接近した私に気がつかないはずはなかったが、振り向かずにはキャンバスにむかっていた。

画の上半分はいま画家が絵の具を重ねていて、葦に覆われた眼前の遠景だった。下半分はほぼ完成し、葦の根元の暗青色の水面に、白いふわりとしたものが浮いていた。それが現実にはない奇怪なものを描いている、と理解できたとき、私は思わず一歩前に踏み出した。長い黒髪を白い衣装に絡ませ、女が瞼を閉じて、水面下に沈んでいた。

「オフィーリア……ですかね」私はそつと尋ねた。
「いや、そんな詩的な画題ではありませんが、そこに身投げした
女を写しているのです」しゃがれた声が答えた。

「湖にはそのようなものは見えませんね」
「そりやそうですよ。これは私の心象風景ですからね。ずっと以
前になるが、実際にそこに入水した女が浮いたことがあったのです
よ。そのときの印象をこうして画にしているのです。いや、すつか
り暗くなってしまうたな。あと少しで完成なのに。十二月の日は短
い。仕上げは明日にしよう」

そういつて画家は、私にみられたことを厭うかのように、そそく
さと店じまいをはじめた。

画家が去った後も、私はたそがれの湖畔にたたずんで、そこに浮
いたという女の姿を私自身の心のキャンバスに描いた。

志摩子。
夕暮れというのは、なぜ、かくも悲しみに似た色なのだろう。

私はゆるやかな雑木林の斜面を登って、ホテルにもどった。白亜
の洒落たホテルは湖を上から一望する高台にあった。すでにチェッ
クインしてあり、私の部屋はホテル本館ではなく、ホテルの広大な
敷地のはずれに建つ和風の離れであった。今回の旅は私が選んだも
のではない。このホテルのオーナー、田所祐輔の招待によるものだ。
この別館も私ひとりのために特別に用意されていた。

水琴亭、と掲げられた小門をくぐると、玄関までの石畳の小道が
掃き清められ、水を打ってあった。もともとは茶室として使われて
いたらしく、一番奥の部屋が本格的な茶室になっていた。そのほか
の部屋が廊下にそって二つほど連なり、私の部屋はそのひとつだっ
たが、内装が洋風に改造され、絨毯を床に敷いてテーブルやベッド
が置かれていた。家具も古い洋風の物ばかりで、レリーフが施され
たガラス張りの本棚には、箱入りの日本文学全集が隙間なく並んで
いた。

私はベッドに仰向けに身を投げ出し、アール・デコ風なテーブル
のランプ燈がまだらな光を天井に投げているのをぼんやりと眺め
ていた。それはやがて幻燈のように志摩子の姿に変容した。すると、
回想がルーレット盤のように回転して、やがて、あるところでぴた
りと止まった。

私は立ち上がって、本棚のガラス扉をあけ、夏目漱石全集の一卷
を引き出した。「草枕」の、たしか、この章だ。

私が探していたページはすぐみつかった。まさにそのページに葉
がはさんであつたからだ。

「私が身を投げて浮いているところを――
苦しんで浮いているところじゃないんです――
やすやすと往生し浮いているところを――
奇麗な画にかいて下さい――」

私を当惑させたのは、この文章の内容ではない。この文は私の既知であり、だから思いついてページを開いたのだ。

しかし、葉は？ この漱石の一文に注目し、参照しようとしただけか。そして文をなぞるかのように、往生し浮いている女を画に描いていた人物があった。

これは仕組まれたことだろうか。ガラス戸の奥の、日本文学全集の中のわずか数行を、私がああ画から連想して探し当てて、それを、だれが予測できるだろう？

私はポケットから田所祐輔の招待状をとりだし、改めて目を通した。私がここにやつてきた理由がその手紙に書かれているわけであり、そこに、鍵がひそんでいるかもしれない。手紙は一ヶ月ほど前に私の家に届いた。

「立花君。あれから幾星霜あり、もはや人生の後半に至り、急に学友である貴兄が懐かしく、しきりに会いたくなくなった。小生の経営する伊豆一碧湖畔のホテルに招待するから是非、来駕を賜りたい。このホテルもこの一碧湖も、貴兄にとって懐かしいはず。一献をさしあげ、旧情を暖めたい。加えて、ホテルの改修について専門家の貴兄の意見も聞きたいと思っっている――」

内容はこのような趣旨で、至極簡単だった。建築家を業とする私も、ちようど大きなプロジェクトが終わり、旅行でもしたい気分だったので、招待を受けることにした。このホテルもこの一碧湖も私にとっても懐かしいはず、と書いてあるのは次のような次第だ。

田所祐輔と私は、学部は異なるが同じ大学の同学年生で、オーケストラ部に所属していた。田所祐輔のチェロはなかなかの腕前で、音楽だけでなく芸術全般にくわしく、リーダー格として部を引っ張り、指揮棒も振った。秋の学園祭の演奏会のために、夏休みは合宿で練習をしようということになったが、学生の身分で金もなく、田所の父が所有する一碧湖のホテルの離れを無償で借りることになった。そしてこの離れに、私を含め、男女十数人の部員が寝泊りした。その中に矢野志摩子がいた。

- 3 -
六時に夕餐を、離れ・水琴亭に用意し、その席に田所祐輔が顔を

出すと、チエックインのときにフロントで伝言を受けていた。時刻近くになると、仲居たちが玄関を開けて、廊下伝いに膳を運び、隣の部屋に準備をしているあわただしい動きがあった。やがて仲居たちがいつせいに立ち去ると、夜の闇と静寂は一層深くなった。

「しばらくして、石畳沿いに足音が近づき、玄関をあけ閉めする気配があり、私の部屋の外から声がかかった。

「立花さま、用意が調いましたので、隣の部屋にお越しく下さいませ」

女の声だった。私は丹前に着替えて廊下に出て、隣室の障子を開けた。火を入れたばかりの囲炉裏に鍋が掛かり、膳が並べられた前に座椅子がひとつ、私のために用意されていた。趣味のよい着物姿の女性が端座して、頭を下げた。

「女将、由梨子にございます」

見事に結び上げた黒髪が動いて、女将はしとやかに顔を上げた。私はあつと、小さく叫んだ。

長い睫毛の下の涼やかな瞳。その奥にひそむ凜とした気色。容姿の、山百合のような匂い立つ気品。

「田所が、どうしてもはずせない急用ができて遠方に出張しまして、今宵は出席できなくなりました。そこで私が代わってお相手をするように、申しつかりました。数日は帰れそうもなく、お会いできないのがまことに遺憾であり、くれぐれもよろしく、このこととでございます」

私は座椅子の席に着き、しばらく言葉を探し、女将に尋ねた。

「あなたはもしかしたら、志摩子さんの？」

「娘でございます。つまり、田所は私の父になります」

「あなたの母上、志摩子さんを存じていたのは三十数年ほど前のこととです。あなたは志摩子さんに生き写しだ。この年月が消えうせて、志摩子さんに会っているようです」

「いいえ、三十数年前の女学生姿の母ではありません。私は三十歳を過ぎ、いささか臺がたちはじめておりますゆえ。でも、私は母を知りません。私が物心つかないうちに、この世を去ってしまいました。自分の命を自分で絶つような仕方です」

「なぜ、です？ なにか不幸なことがあったのでしょうか」

「私にもわかりません。母のことについては、父はなにひとつ教えてくれません。今宵、こうして立花さまにお会いできたのは、きつと母の手引きです。この機会に、母のことを知っているかぎり、お教えくださるとうれいのです」

「いや、私が知っているのは学生時代のわずかなことです。しかも結婚なさる以前です」

「ええ、それで十分です。母が、青春時代をどう輝いて生きたか、

なにを愛して生きていたのか、それをお聞かせ願えれば、私も満たされます」

「志摩子さんは、音楽を、とても愛しておられました。大学のオーケストラ部で私たちは一緒でしたが、バイオリンがとても上手で、志摩子さんの演奏にはいつも心をうたれました」

由梨子は手を伸ばして、爛をした酒を私に勧めた。私は手元に伏してあった盃を取りあげて、酌を受けた。

「母は・立花さまを愛していたのではありませんか？」

光のようにまつすぐな問いを投げかけられ、私はまじまじと由梨子を見つめた。

「どうしてそう、お思になるのです？」

「母が私に残していった唯一の形見は、ケースに入ったバイオリンでした。私が大人になってから、片付けの最中にケースを保管しておいた棚から誤って落としてしまったことがあります。中のバイオリンはなんともなかったのですが、ケースの中の小物入れが壊れ、点検していると裏地に隠されていた写真を見つけました。若い母が、すてきな青年と肩を組んで笑っていました。大切なバイオリンとともに、ひそかに隠された写真。それは母にとって、とても大切な方だったにちがいません。その方の前に、いま私は座っております」

2

「私と田所君が大学三年目の夏、オーケストラの部員がこの離れに合宿したことがあります。本館からこれだけ離れているので、楽器の音も本館の客の迷惑にならないだろうし、むしろ遠くから響いてくる合奏は多少下手でも、夏の湖畔のホテルの雰囲気華やかにするだろう、というような口実で、田所君が経営者の父を説得したそうです。」

午前中は全員でのリハーサルに当てましたが、午後は自由時間で、グループをつくってはカルテットやデュエットを組み、湖畔の森や、ときにはボートで湖上に出て練習や合奏をしました。トランペットやホルンが森から響いてきたり、フルートやオーボエの音が湖上を伝わってくるのは、なにか、童話や、牧神の世界のようでした。

志摩子さんは一年後輩の二年生でしたが、とても魅力的な女性で、部員の男たちの憧れでした。みな、彼女を自分たちの合奏に引っぱりこもうとしました。でも、ビオラの私となぜかとても気があって、二人はデュエットを奏でたりしました。志摩子さんが木漏れ日の森や、霧の立ちこめた湖畔でバイオリンを奏でている姿は、妖精のようで、私は聞きほれるだけでなく、うつとりと見とれていたことが

たびたびありました。

合宿十日目ほどの午後、田所君が大切にしていたチェロの弓が折れたことがあります。午前中の練習が終わって、皆が食事の用意をはじめたとき、突風が開け放って立てかけてあった襖を倒し、ちやうど椅子に寄せ掛けてあった弓にぶつかって折ってしまったのです。当方で数十万円もした、父にせがんで買ってもらった自慢の弓でしたから、田所君は頭を抱えてへたり込んでしまいました。だが、翌日になって、田所君は氣をとりなおし、練習を中休みして、みなで西伊豆海岸に泊りがけで泳ぎに行こうと提案しました。みな、大喜びで大賛成です。しかし、だれか一人はここに残って楽器の番をしなければなりません。志摩子さんは急に気分が悪い、といいだして海水浴行きに参加しないことになったのですが、病気の女性と楽器の両方の面倒をみるために、私が居残ることになりました。私は水が怖くて泳げない、という嘘の口実を使いました。本当は志摩子さんの病気がとても心配だった。

ところが志摩子さんの病気も実は口実でした。みなが出かけてしまふと、だれにも邪魔されない二人だけの時間がありました。

「立花さん、アーサー王物語、知っているでしょう？」と、文学科で西洋文学にくわしい志摩子さんがいいました。

「王と騎士たち全員が馬上槍試合に遠方の館に出かけることになったとき、口実をもうけて、王妃グイネビアと円卓の騎士ランスロットは城に居残り、二人で密会する。あれみたいね、私たち」

「王妃がアーサー王を裏切って騎士と姦通する話？　ぼくたちはだれかを裏切って姦通するわけじゃないだろう」

「でもいつか、私たち、姦通するような気がするわ．．」

「すると、ぼくたち同士は結婚しないってこと？」

「夫婦愛ではなく、姦通のほうが、愛が深い、つてこともあるわ。夏目漱石が、この王妃と騎士の姦通を、薙露行、という掌編に書いているのよ。擬古文を駆使した習作。そういうの、漱石にはいくつかあって、私はそういう作品がとても好き。有名な、草枕、もいかなれば、実験小説ね」

「ぼくは、坊ちゃん、くらいしか知らないよ。どんな内容？」

「草枕、は読む価値があるわ。あの作品のモチーフは、女の憐れ、かな。主人公の画家が滞在する山間の温泉旅館の女将に、あなたにはなにか情念が欠落しているので、画にならないと写生を断っている、従弟の出征を駅で送別する最後の場面で、別れた夫が落魄の身となっておなじ汽車で去っていく姿を車窓に見て、女将の顔に突如、憐れ、の表情が一面に浮かぶ。それをみてとった画家は、これだ、これで画が成就した、と女将に告げるのです。」

女も芸術も、憐れ、という一点が欠けては成り立たない。漱石はそう、いいえ、思った。この漱石の憐れの概念は西欧人のシンパシー、に近い、と私は思うの。つまり、悲しみや喜び、苦しみを共感すること。シンフォニーが、さまざまな楽器の音の共感であるように「私がその後、草枕、や夏目漱石に傾倒するようになったのは、志摩子さんの影響です。志摩子さんはただしく漱石を理解していた。この憐れの情念を、みずからも豊かに育んでいた、と、思います。だからこそ志摩子さんの演奏する音楽は、まことに共感に満ちたものでした。」

その深夜、別室で寝ていたはずの志摩子さんが、私を起こしにきました。

「立花さん、変なことがあるの、ちよつと私の部屋に来て・・・」

「どうしたの？」

「床下から、音がするのよ」

「どんな音？」

「なにか、水滴のような、よく響く、連続した音。昨夜まではほかの女二人が深夜遅くまできやあきやあ、お喋りしていてもさかかったのだけど、今夜は私一人で静かでしょう。私の左の耳は、子どものときからバイオリンが耳元で鳴っているの、聴覚がわるいのも右の耳は、そのかわり、音に対しては異常なくらい敏感になっている。だから、右の耳を下にして寝ていると、床下の音がよく聞こえるのよ。最初は、縁の下にたまった雨水が地面にたれ落ちていくの、下で思っていたけど、地下のずつとずつと、下のほうなのよ・・・」

「水道の配管か溝かなんかに水が流れているんじゃない？」

「いいえ、ちよろちよろというような自然音はなく、水滴のような音は、いくつかの音程を、リズムカルに奏でていて、ちゃんと音楽になっているのよ。まるでだれかがハーブでアルペジオをかき鳴らしているようなの、地下の深いところで・・・」

志摩子さんの音に対する感受性は疑う余地はありません。私は飛び起きて一番奥の部屋に行きました。女性部員は三人だけなので、狭い茶室を割り当てられていました。いま、私たちが座っている部屋の隣です。囲炉裏と床の間のあいだの狭い空間に志摩子さんの寝ていた布団が敷いてありました。私は布団をはねて、耳を直接畳につけて聞き耳を立てました。私は布団をはねて、耳を直接畳に

「うん、かすかだが、たしかに聞こえる。君のいうような、アルペジオだ」

「でしよう？」

私たちは顔を見合わせました。アルペジオというのは、和音を分

散して鳴らすことです。

私たちははしばらく、黙って座っていました。座っていると、あの地下の音は聞こえません。志摩子さんは青い顔をしています。このままでは一晩中眠れないでしょう。

私は部屋をみまわしました。

「ここは茶室か・もしかすると、水琴窟、じゃあないかな？」

「すいきんくつ？」

「うん、水の琴、洞窟の窟。手水鉢や笥の水を水滴にして落下させ、それを伏せた甕で受ける。すると、落下音が内部で琴のように響く。窟、といっても、洞窟ではなく、庭に埋めた逆さの甕のことをいうのさ。甕の大きさや中に溜まった水の水位によって音程を変えられることができる。いかなれば、水の楽器だ。いまでは忘れ去られているが、江戸時代の茶室の庭に、痕跡がのこっているそうだ」

「さすがは建築学科の学生ね、よく知っているわねえ！」

受け売り知識さ。由来については不明らしい

「でも、ここには庭らしい庭はないし、それに響いてくるのは、地下から、よ」

「・たぶん、地下に空洞があつて、自然が作り上げた水琴窟になつているのかもしれない。ほら、鍾乳洞で、水が滴り落ちているだろう？ あんな具合さ。一碧湖は水蒸気爆発でできた火口湖だといわれている。だから、地下に、水が落ちる空洞があつてもおかしくないよ」

私は自分の推理に夢中になりました。もし本当なら、茶室建築史上の大発見になります。私はその存在を確信しました。だってこの離れの名前は、水琴亭、と名づけられていたのだし、この位置に茶室を作ったのは、水が滴り落ちる天然の洞窟の存在を知っていた何者かが、水滴の音響を、客の茶人に楽しんでもらおうと意図したからに違いありません。とすれば、この茶室から地下の洞窟へ客人を案内する通路があるはず。

私はこの離れの位置と構造を思い起こしてみました。湖の水際から百五十メートルほど、ゆるやかな松林の斜面を登ると、大きな岩の隆起にぶつかり、その岩を抱えて松の巨木が生えている。この離れは、その松に守られるように岩に尻をくつつけて建てられています。普通なら岩から離して建てますから、どうも不自然です。私は岩と接触している部所が、この茶室の床の裏の間のこととは、建築を専攻する私なら容易に想像がつかまりました。私は床の間のつくりを仔細に調べ、志摩子さんの鋭敏な右の聴覚を借りて響いてくる音の方角や大きさを探り、ついに発見したのです、地下への秘密の通

路を！

身ひとつがやっと入れそうな狭い、真っ暗な入り口をのぞいて、恐怖を感じなかつた、といえばうそになります。しかし若者の好奇心はさらに大きかつた。

非常に玄関の棚に備えられていた蠟燭を持ち、足元を照らしながら、私は岩盤の裂け目に刻まれた岩の段を伝つて地下に降りて行きました。ひんやりとした空気が頬を撫で、水滴の音が急に大きくなりました。私は蠟燭をそつと振つてみました。光は闇に吸い込まれます。かなり大きな空洞なのでしよう。洞窟の底は平坦になつていました。志摩子さんは私の手をつよく握り、ついてきました。

空洞の全貌を把握するには蠟燭の小さな光では不十分です。それでも部分的に照らし出される岩肌から推察すると、三十畳くらいの広さだつたでしようか。岩の天井から、水滴が絶え間なく降り落ちて、奥の闇の底に大きな水溜りを作つています。照らしても水の深さが分からないのですが、わずかな流れがあつてどこかに流れ出るようです。さもなければ、この空洞は水で満たされてしまひますからね。

私の足元の水際に、ひと抱えもある素焼きの甕が逆さまに伏せて並んでいました。大小、十数個ありました。甕の上部のところ、逆さですから甕の底になる部分に穴が開いて、天井から落ちる水滴が甕の内部に吸い込まれていきます。落下した水滴が甕の底の水を打ち、甕の中で残響し、そのようにして多数の甕の残響が、空洞全体で共鳴します。甕の大きさによつて音程が違い、水滴が落ちる時間のずれがリズムを作つていました。

それはまことに不思議な音楽でした。大自然と何者かの人間の作為によつて作り出された水の音楽。

私たちはやがて地上にもどり、ありつたけの蠟燭と、それぞれの楽器を持つて、ふたたび、降りてきました。岩盤と水がつくりあげた自然の地下のコンサートホールで演奏しようとして、どちらからともなくいい出したのです。蠟燭を岩のあちこちに立てると、濡れた岩肌や水滴が光を反射し、おびただしい光の粒となつて、豪華なシャンデリアのように輝きました。

私たちは楽器を構えました。黙つていても、モーツァルトの、バイオリンとビオラのための協奏交響曲、二楽章のカデンツァにきまつています。これは二人がいつも弾いて楽しんでいて、暗譜しています。カデンツァというのは楽章の終わりにオーケストラが休止し、独奏者だけがメロディーや和声を自由に任されて即興的に独奏する部分なのですが、この曲に限つてモーツァルト自身が書いたカデンツァが残っている。バイオリンが女を、ビオラが男を、とでもいうように、たがいに呼びかけ、喜びと、憂いと悲しみの調べを奏で

る。男と女の、愛のエッセンス、とでもいえましょう。

演奏を終えると、二人は震えるほど深く感動しました。それから、楽器を置いてたがいの手を取り合い、求め合いました。私たちはこの洞窟の胎内で、地の、水の、光の祝福を受け、結ばれました。

私たちはあの水琴窟のことも、もちろん隠された通路のことも、だれにも語りませんでした。そこは、私たち二人だけの神殿、サンクチュアリだからです。そして夏が終わり、一碧湖を去り、ふたたびキャンパスにもどってからも、私たちは愛を深めていきました。大学を終えると、ロンドンに事務所を構える私の伯父の建築家から、見習いとして勉強にこないか、と誘われました。志摩子さんが大学を卒業し、私の建築家の仕事が定着したら結婚しようと言いつつ、私は英国に発ちました。二年の予定が倍に延びました。その間志摩子さんに時折手紙を出したのですが、しばらくすると、返事が返ってこなくなりました。その理由は帰国してから判明しました。志摩子さんは田所君と結婚し、伊豆のこの地に移り住んでいたのです。私は絶望し、ずっと独身のまま、建築家としての仕事に没頭してきました。

それから、志摩子さんとは会うこともなかったのですが、たった一度だけ、偶然にお会いしたことがあります。

あるとき、上野の音楽ホールで、あの、バイオリンとピオラのための協奏交響曲の演奏があることを知りました。この曲がプログラムにとり上げられることは非常にめずらしく滅多にない機会だったこと、また私にとつては忘れ得ない曲だったので、私は聞きに出かけました。

休憩時間にロビーで、志摩子さんに出会ったのです。

志摩子さんもこの協奏交響曲の演奏があるのを知り、もしかしたら私と同じように聞きにくるのではないかとひそかに期待し、杉並の実家に用があるという口実で伊豆から出かけてきたそうです。そして、田所君と結婚した経緯も聞きました。私がロンドンで英国の女性と婚約した、と田所君が志摩子さんに偽りの情報を伝え、失意の志摩子さんに強引に求婚したそうです。その夜、私は志摩子さんと一夜を共にしました。でも、それきりで、その後、お会いすることもありません。いや、お会いすることが出来なかった。ずっと後になって、オーケストラ部の昔の仲間から、志摩子さんの不幸な最期を聞いたのです――

「最後に母にお会いになったのは、いつのことだったでしょうか？」

それまで黙って私の話に耳を傾けていた由梨子が、はじめて口を

挟んだ。

「たしか、志摩子さんが結婚してちょうど五年目、だといつていましたし、私が帰国して三年、でしたから、19××年の、冬です。でもどうして、そんなことを聞くのです？」

「・・私はその次の年の秋に生まれました。そしてその翌年春、母が身投げしました」

3

翌日、ホテルを出立するまえに、湖畔を逍遙した。昨日の画家が、同じ風景に向かつていた。私は近寄り、声をかけた。

「ほぼ完成、ですね」

「いや、完成、はないのですよ。それに完成させるつもりもありません。こうやって同じ画を描いたり塗りつぶしたりしていること自体が目的、ともいえません」

「私はこの画とよく似た画をみたことがあります。ロンドンの美術館で、英国人画家ミレーの、オフイーリア、です。天使が降りてくるのを迎えるように両腕を空中に挙げ、顔は耳から上が水面の上に乗って、まだ生きて呼吸しているようでした。とても幻想的で忘れません。でも、あなたがいまお描きになっている女性は顔を水面下に水没させていますね。完全に死亡しているか、水底から浮上してきたかの、どちらかだ。また、両手ですが、左手を外側にひねり、右手を軽く握って下に向けている。バイオリンを弾いている手の格好だ。つまり、この画に描かれているのは、水底から浮かび上がったバイオリンを弾く女。特に弓を持つ右手の小指のデリケートな格好を、ここまで正確に描けるのは、弦楽器を自ら演奏する者のはず」

画家はぎくりとして筆を止め、サングラスを驚鼻にのせた顔が振り返った。私は遠慮なくそばに近寄ってしゃがんだ。

「もう芝居はやめにしないか、田所君。君が描いているのは、志摩子さん、だ。君の妻で、この湖に身を投げた、という。私はね、志摩子さんは君の手によって命を奪われたのではないか、という疑いを、昨日この画を見て、抱きはじめたのだよ」

画家はサングラスをはずし、つけ鼻をとって、苦笑した。昔の面影をとどめてはいたが、すっかりやつれた初老の男の顔があらわれた。

「見破られたか、立花君。いまさら挨拶するのもおかしいが、来てくれてうれしいよ」

「招待してくれたのは君だ。感謝するのは私のほうだ。昨夜は君の娘さんのお相伴で大変なご馳走になった。お母さんに生き写しで、まるで志摩子さんと一緒だったような気分だった。でもなぜ、いま

さら君はこのような芝居がかったお膳立てをしたのかね？」

「まあ、罪滅ぼしのようなもの。君にいきなりの会うのがちよいと気が引けてね。ここで君が来るのを変装して待っていたのだ。君の興味をまちがいに惹くような画を用意してね。私は近くに美術館もやっていて、絵心も少しはあるつもりだ。だか・私に疑いを抱いたのは、なぜかな？」

「第一に、離れの漱石全集の草枕に、葉を挟んであったこと。あれは君の仕業だ」

「志摩子は草枕が好きでよく読んでいたよ。葉を挟んだのは志摩子だろう」

「いいや、あの葉は私が英国でみつけたもの。ウイリアム・モリスの、王妃グイネビア、のイラストで、志摩子さんと私だけが知る符牒なのだが、手紙に同封して贈った。杉並の矢野家の住所に出した手紙は結婚後、君のところに転送されたはずだが、一通も志摩子さんには渡されなかった。これは志摩子さんからあとで聞いたことだ。」

志摩子さんはあの葉をうけとっていなかった。つまり、葉を挟んだのは、君だ。君は万一警察から疑いがかかったときに、志摩子さんが、自から身を投げたように思わせるために、あの草枕の身投げの文章のところ、葉を挟んだ。いかなければ偽装工作さ。そして、君の、この画だよ。死体があそこから、湖の水底に流れ出て、湖面に浮かび上がることを知っているは私と君以外、いないだろう」

「あ、そ、ことは？」

「君の犯行現場さ。この一碧湖は、奇妙な湖だ。ここには流れ込んでくる川が一本もないのに、大きな湖となっている。湧水か伏流水があるはずだ。あの離れの水琴窟はこの湖の水源になっているにちがいない」

田所祐輔は肩をゆすらせて大きく咳をし、しばらく湖面を眺めていたが、語りはじめた。

「君をここに招待したのは、だ、君から志摩子を奪った罪悪感と、志摩子の死についての私の苦悩から決別したためだ。君にすっかり話してしまえば、私の魂は開放されてあの世にいけるし、志摩子の供養にもなる、と考えた末だ。しかしいきなり面会しないで、ちよつと工夫を試してみたのを許してくれたまえ。由梨子を君にじっくり会わせたかった意図もあったのだよ。その由梨子だが、あれの本当の父は君ではないか、という私の疑惑が、悲劇の根底にあった。」

君が志摩子とコンサートで密会したことはすぐ分かった。志摩子の実家にあの晩電話してみたら、志摩子はきていなかったからだ。私は帰ってきた志摩子を問い詰め、君と一夜を過ごしたことを知っ

た。私は嫉妬のあまり、志摩子を力づくで奪った。長いこと夫婦の交わりを拒否してきた志摩子だった。男というのは愚かだ。嫉妬、という毒蛇に咬まれると、その毒に麻痺し、見境いなくなる。

志摩子が妊娠したのはそのあとだ。君か私か、どちらの子かわからずに、私は悩み、それから私は志摩子に辛くあたった。妊娠中で、ただでも精神が不安定な志摩子は責め苦のために、精神が徐々に蝕まれていった。陣痛が予定よりも早く始まって、私が車で志摩子を病院に運ぶ途中、志摩子はうわごとで君の名を呼んだ。

由梨子が誕生してから、志摩子の状態はいつそう悪化していった。夜半に、錯乱して湖畔を徘徊しているところを、人に目撃されたこともあった。ある晩、志摩子の姿がみえないので、あわてて外に出た。私たちの住まいは本館にあったのだが、すぐ森のなかを彷徨する志摩子を見つけた。蠟燭を片手に、離れに向かつて夢遊病者のように歩いていった。満月のあかるさと沈丁花の匂いがむせ返るようにあたりに漂っていたことを、いまでもおぼえている。

あのとき、志摩子をすぐ連れもどせばよかったのだ。だが、私は後をついて行った。離れにいつて、なにをするのだろうか、といぶかかったのだ。離れは、VIP客以外は使用しないので平素は戸締りしてあったのだが、志摩子は鍵を持っていて、開けて中に入った。しばらく出てこないのも心配になり、あとを追って部屋を探したが、志摩子がいなくて驚いた。茶室の床の間の脇の壁が、くぐり戸のように開いているのをみて、下りていった。

洞窟の底で、志摩子は蠟燭の光をかざして、なにか曲を口ずさんでいた。私が背後から近寄ると、亡霊のように振り返り、来てくれたのね、立花さん、といった。私は逆上して、志摩子を平手打ちにした。志摩子が、きゃあ、と叫んで、足を滑らせ、水に倒れた。までは、見えた。だが志摩子が手にしていた蠟燭が消え、洞窟の中は真っ暗になった。すぐ志摩子を呼んだが、声がない。手探りで水の中を探したが、奥のほうはだんだん腰より深く危険だった。私はそこを飛び出して、住居にもどり、懐中電灯を持って離れに駆けもどった。だが、いくら洞窟内を照らしても、志摩子の姿はなかったのだよ。

「どうして君は、すぐ、警察に捜索を求めなかったのだい？」
「いくら探しても洞穴には姿がなかったもので、私が懐中電燈を取りにもどった隙に、闇に潜んでいた志摩子はあそこから、また外に出たのだ、と思ったのだ。だから私は湖畔の周辺を探しまわった。しかし朝になってもみつからず、捜索願を出そうかと思案しているうちに、志摩子の遺体が、湖に浮かんでいるのが発見された。入水自殺、として処理された。あとで考えると、あの洞穴の水は湖に流れこんでいるのではないか、と思える。」

真相は私にも分からない。

いずれにしても、志摩子を死に追いやったのは、まちがいでなく私だ。あれからずっと苦悩の人生を送った。私がそのあと、こうして、この湖畔に座って志摩子の画を、飽かずに描いているのも、私は己の愚かさを悔い、贖罪に身を焦がして、志摩子への追悼を捧げているのだ。だが、もう、疲れたのだよ。だからこうして、君を呼んで、事実を告げ、君に許しを請う気になった。

あの葉の、王妃グイネビア、だがね。美術館主でもあるので、モリスのことくらいは知っているよ。王妃が半ば解いた帯に手をかけて、思索している。これから姦夫のために衣服を脱ごうとしているのか、もう事が済んで帯を結ぼうとしているのか、どちらにも解釈できる、妙に悩ましい画だ。のちに結婚することになる女性をモデルにした、と記憶しているが、結婚後の、彼女の度重なる密通を、モリスはそのときすでに、予感していたのではないか？ モリスも嫉妬にさいなまれた不幸な生涯を送っている。私が君の手紙にあったあの葉を捨てないで、草枕のページに挟んだのは、水死した志摩子に、ひそかに、不義のラベルを、刻印を貼るためだった。まさか、君の目に触れるとは・・そして、私は、あの漱石の文章の通りに、奇麗に画を描いてやっている。

美術の知識をさらにひけらかすとだ、テートギャラリーだろう、君がロンドンで見たというオフィーリア。あれは夏目漱石も留学中に見たはずだ。強烈な印象を受けたらしく、草枕に、あのような文を書いた。なんだか、ぐるぐる因果が巡っているようだよ。

もうひとつ。これは音楽に関するので、君も詳しいだろうが、妻の不義にさいなまれた作曲家はグスタフ・マーラーだ。愛の苦悩と、それからの解放と諦めを、あれほどまでの高みに表現した音楽は、ほかに例がない。私にはことさら、そう感じるのだ。妻の不貞も、ときに芸術家をして、人間の至宝を生み出させる。

そうそう、由梨子だがね、成長するにつれて志摩子にそっくりになった。なんだか、志摩子が娘にのり移って、私を恨んでいるように、で気味悪く、遠ざけた時期もあった。由梨子がこの年まで、みずからの結婚を避けてきたのは、夫婦の恐ろしさを本能的に察していたからだ、と思っている。

だが、その一方で、私は由梨子を愛していたのだ。気立てもやさしく、容貌も志摩子譲りで人並み以上だ。志摩子を憎みながらもそのうつくしさを愛したように、人間には相反する感情が対位法のよう

に絡み合う。

ついに私の悩みに決着をつけたくて、このあいだ、友人の医者に頼んで、こっそりDNA鑑定をしてもらった。

由梨子は、私の子、だったよ。それを知ったとき、希望、が、暗

い雲間から陽光が射してきたように感じた。希望、つまり、生きる喜び、生きる価値、だよ。親子の情愛、といってもいい。生命のつながり、というのは、まことに不思議なものだ。もつと早く知っていれば、こんなに苦しまずに、由梨子と幸せに暮らせたかもしれない。由梨子にも不幸をかけてしまったのが辛い。余計なお世話かもしれないが、わが娘、由梨子が、君の希望、君の生きる喜び、になることを切に祈るよ。そうなたら、あの世の志摩子もまた喜ぶだろう。志摩子の果たせなかつた夢だったからね」

4

翌年五月、田所由梨子から手紙が届いた。

父、田所祐輔がホスピスで三月に死去したこと、本人の希望で密葬にし、死亡通知を出さなかつたこと、ホテルの経営を継いだこと、ホテルの名称を、湖畔ホテル・一碧、から、一碧湖畔・ホテル水琴亭、と変えること、それにもないホテルを改装するので、設計の相談をしたこと、が簡潔に述べられていた。最後に、こう、書き添えられていた。

「また、ぜひお会いしたく存じます。その折には、あの水琴窟に私を連れていってください。蠟燭をいっぱい持っていきましよう」

終